■連載　縄文以来の伊達心⑩

カシミヤ、１枚のセーターの３～５頭分

マテリアル・コンサルタント　川島茂信

4）ヨーロッパの伝統では、モヘアと羊毛を混紡して梳毛紡績の繊糸、ニット糸を紡ぐ場合、普通27～32ミクロンの羊毛と混紡して20～36's の糸を紡績するが、日本人好みでは18～24ミクロンの羊毛と混紡して30～40's＆upの糸を紡ぐ。

この場合肝要なのは縮絨しないモヘアより縮絨する羊毛の方が毛足が長いことである。このことは手編み用ファンシー・ヤーンでも同じ理屈で、何れもモヘアが糸の表面に出て羊毛が糸のセンターに入るようにするための工夫の一つ。また製品の最終仕上がりもバランスよくクリアにセットされる。

梳毛紡績では毛足の短い繊維が糸の表面に出て長い繊維が芯に入る。モヘア・トップは日本のアテネーターでもある程度レデュースできる。英国は強力なるギル・ボックスをこの目的のために持っている。

シルエットにそれ位の張り腰が求められているのと、如何なる繊維よりも鮮明に染まる優雅なセミ・ブライトの風合いと、絹よりも表現性のあるソフトなタッチとツイーディな嵩高性である。紡毛紡績の場合は反対で、モヘアが糸の表面に出ます。

5）モヘア・トロピカル。通常モヘア100%から50%以上で紡まれた緯糸が織物の表面に盛り上がり、経糸が沈んで見えるように仕上がらないとモヘア・トロピカルの風合いは出せない。

この目的の為に、弛緩弾性を利用してションヘル織機で緯糸を弾みで確り打ち込むとか、整理工程の木ローラーで徐々にテンションを掛けるとか各工程であらゆる工夫がされるが、一番大切なのは緯糸の原料の選定とその紡績技術に総てかかっている。

「カシミヤ」

１）　沿革：カシミヤはカシミヤ山羊の毛でヒマラヤ山麓の高冷な渓谷、中国の内蒙古、モンゴル共和国、イラン北部、アフガニスタン北部にわたって飼育され、羊毛の飼育より倍の手間がかかる。全身の表面は普通の山羊の様に粗い毛で被われており、その下に酷寒に耐えるための繊細にして柔らかな綿毛が密生している。

この綿毛は春には自然に脱落するので、小さい熊手の様な金櫛で梳きとる。

綿毛の採れる量は一頭当たり150～250gと少量で、一枚のセーターを作るのに3～5頭分の毛が必要で、極めて貴重な毛である。推定中国で850万Kg、モンゴルで200万kg、イランで100万Kg、アフガニスタンで50万kg、世界合計1200万kgで羊毛の全産毛量に比して僅か0.3%に当たり、日本は20%を原毛で消費している。

世界の需要の増加に答えるべく増産に努めているが、一部零細企業が綿カードでの整毛で普通の山羊の毛から綿毛を微少量採り、これが増量のために混入されるので、綿点のコンタミネーションが発生し、又アンゴラ毛が混入されるので、筋の良い原料確保の努力が必要である。カシミヤは手触りが極めて柔らかく滑りがあり、絹の様な光沢と保温性に優れ、繊度は、中国産は16～17ミクロン、モンゴル産は17ミクロン、天然の色は白が50%で、他は茶とグレーである。